OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スウェーデン東インド会社と茶貿易　1731-1813
Author(s)	ミュラー, レオス
Citation	パブリック・ヒストリー. 2005, 2, p. 60-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public, Vol. 2, 2005, pp. 60-72
Swedish East India Company and trade in tea, 1731-1813
Leos Müller

スウェーデン東インド会社と茶貿易　1731 ― 1813

レオス・ミュラー
玉木俊明（訳）

> とはいえ、東インドとの貿易が開始されたことで、茶の価格は安くなった。だから最も卑しい人々でさえ、茶は手が届く商品となった。スウェーデンと商取引をしている卸売業者は、イェーテボリにあるスウェーデンの会社にサービスを提供する多数のスコットランド人とのコネクションがあった。だからこの薬物は切っても切り離せない商品となり、最も貧しい主婦でさえ入手するようになった。以前なら、こんなことは滅多になかったのだが。ところが今では、手近なものとなり、水やブランディー、時にはラム酒にさえ混ぜられる。茶とポンチは、こうしてビールとエールを飲む人すべての日常食品かつ堕落品となった。この時、砂糖の影響は突然、悲しむべきほどに強く感じられたのである。
> （Duncan Forbes, *Some considerations of present state of Scotland*, Edinburgh, 1744）(1)

はじめに

上述のダンカン・フォーブズからの引用文は、スウェーデン東インド会社（以下 SEIC と略す）と 18 世紀の消費形態の大転換を、極めて簡潔に描いている(2)。第一に、SEIC と「最も卑しい人々」および「最下層の人々」の間で飲茶の文化が広まっていった関係を明らかにする。第二に、フォーブズが示したのは、この事業が、SEIC の根拠地があるイェーテボリに定住していた、数多くのスコットランド人と関係していたことである。第三に、引用文はまた、18 世紀に飲物の文化が変化した際に、茶が大きな役割を果たしていたことを指摘する。この変化は、飲物の消費に非常に大きな影響を及ぼした。伝統的な冷たい飲物（ビールとエール）の消費が減り、コーヒー、飲茶、砂糖、ラム酒、ブランディー、パンチの消費が増えたことと関係して

(1)　Mintz [1985], p.114 から引用。
(2)　消費社会の誕生に関する古典的作品として、McKendrick, Brewer, and Plumb [1982]。

いたかもしれない。これらの事柄は、新しい飲物文化と共に起こったからである。さらに、引用文は、飲茶と砂糖の消費との関係を強調する。砂糖経済（砂糖の生産、取引、消費）は、植民地世界と 18 世紀後半の工業化によって生じた経済変化の推進力だと考えられることが多い[3]。

ダンカン・フォーブズの発言と同様、私がここで論じたいのは、SEIC が現実にこの転換で極めて重要な役割を演じていたことである。SEIC は、ヨーロッパで代表的な低品質かつ低価格の茶の供給者であった。だからイギリスの下層階級の間で飲茶が現実に広まったのである。SEIC が再輸出をしていたことについては、ほとんど無視されてきた。だがそれは、この会社の活動の重要な一面であった。少なくとも SEIC の研究においては重要なのである。

SEIC の歴史を扱ったスウェーデン語の文献は極めて多い。だが、その大半はこの企業の「異国情緒豊かな」性格に関心がある。つまり、SEIC の中国までの遠征、中国に関する知覚、スウェーデンでの中国に対する意識、SEIC の航海に参加したスウェーデン人科学者などに関心があるのだ。人目を引く企業だとみなされているが、この会社がスウェーデンの社会や経済に大きな影響を及ぼすことはなかった。イギリス、オランダ、フランスの特許会社と比較すると小規模で取るに足らない役割しか演じなかった[4]。しかし逆説的なことだが、イギリスの文献では、SEIC はもっと重要で、大きな貿易会社であり、イギリス東インド会社（EIC）の競争相手だと考えられているのである[5]。

スウェーデン東インド会社の事業戦略

スウェーデン東インド会社 Svenska ostindiska kompaniet は、1731 年 6 月 14 日に、ストックホルム商人であるヒンドリヒ・ケーニヒ商会 Hindrich König & Company に付与された特許状に基づき設立された[6]。特許状に含まれていたのは、東インドでのすべてのスウェーデン貿易に対する独占権である。「東インド」とは、喜望峰以東の広大な地域のことであった。とはいえ現実には、SEIC は、その名称にもかかわらず、貿易の範囲はほぼ広東に限定されていた。

貿易の範囲が限定されていた現実的理由としては、他の会社の存在が挙げられる。スウェーデンが東インドに到達したのはかなり遅かった。しかも、既存の大規模な会社とその母国との競争がかなり激しくなった時代であった。SEIC は、イギリス人、フランス人、オランダ人の目には、少し前に廃止されたオステンド会社の生まれ変わりだと映った。したがって、既に東インドに進出していた列強は、東インドでのスウェーデンの貿易を妨害するためなら何でもした。既に広東への最初の航海で、オランダ人とのトラブルに巻き込まれていた。フリーデリク

---

(3) 砂糖の重要性に関する大きな議論については、Mintz, [1985] をみよ。また、Pomeranz [2000], pp.117-126。

(4) SEIC に関する最も有益な概説としては、Nyström [1883]; Kjellberg [1975]; Konickx, [1980]; Åberg [1988]; Åberg [1990]。スウェーデンの中国に対する認識としては、Nyberg [2001] をみよ。

(5) Cole [1958]; Grill [1958]; Grill [1961]; Kent [1973], pp.112-129. 茶の密輸とイギリスの政策については、Mui [1984] をみよ。

(6) Kjerllberg [1975], pp.40-41.

ス国王号 Friedericus Rex は、1733 年にバタフィアに停泊することを余儀なくされた。しかしこの船はすぐに解放され、何の問題もなく航海を終えることができた。これは、巨額の利潤を得た航海であった[7]。2 回目の航海はウルリカ・エレオノラ女王号 Drottning Ulrica Eleonora は、イギリスとフランスとの間ではるかに困難な事件に巻き込まれた。1733 年に起きた、いわゆるポルト・ノヴォ事件 Porto Novo Affair がそれである。この船は、最初はインドに行って、次いで中国で欲しい商品を購入し、それから広東まで航海を続けるはずであった。これは、他国の東インド会社でよくみられた航海である。しかしながら、インドのポルト・ノヴォにこの船舶が停泊した時、イギリス人とフランス人が積荷を強奪し、乗組員の一部を監禁したのである。この事件は、イギリスとスウェーデンの間の重大な外交事件に発展したので、あとでこの話題に戻りたい。ポルト・ノヴォ事件ののち、スウェーデン船がインドに停泊することは稀になった[8]。SEIC が存在していた時代（1732-1813）に、アジアに 132 隻の船舶が送られたが、そのうち 124 隻は広東にしか向かわなかった[9]。したがって、「スウェーデン広東会社」のような名称の方が適切なはずである。

スウェーデン人がほとんどもっぱら広東としか取引しなかった理由のひとつは、中国の外国貿易の性格による。アジアの他地域とは違っており、特に 19 世紀とは対照的なことだが、ヨーロッパの対中国貿易は中国の貿易規則にしたがって形成された。中国政府が貿易を許可した唯一の港が広東であり、商業に従事していたのは特権的な中国商人だけであった。他方、中国人は、小規模なヨーロッパ商人の一団がこの特権貿易に参加することを妨げはしなかった。それゆえ、オステンドやスウェーデン、デンマーク、プロイセンのように小さな会社でさえ貿易することができたのである。それとは対照的に、オランダ領東インド会社とインドでは、巨大なヨーロッパの会社がより効率的な独占的支配を獲得した[10]。

広東にスウェーデンが進出した第二の理由は、中国製品への需要がヨーロッパで急速に増大したからにすぎない。茶、絹、陶磁器の貿易は、18 世紀の長距離貿易で最大の利益を産む分野のひとつであり、旧来の会社は新しい需要になかなか応じられなかったように思われた[11]。だから、17 世紀に香辛料の独占に頼っていたオランダ東インド会社（VOC）は、この変化にはなかなか対応できなかった。たとえば、オランダ人は、広東で茶を直接購入するのではなく、バタフィアの中国人商人から購入した。そのため茶の質は悪化し、ヨーロッパの消費者に茶が届くまでの時間が延びた。

SEIC はもっぱら茶を取引するようになった。1730 年代から 1780 年代にかけて、茶はヨーロッパの新飲料の主要な供給者のひとつとなった。他方、このように貿易商品を特定化した

---

(7) Grill [1961], pp.102-108; Kjerllberg [1975], p.44.
(8) Grill [1958]; Kjerllberg [1975], pp.50-55.
(9) Müller [2003], p.30.
(10) 広東の貿易組織については、Grill [1961], pp.29-39。
(11) Degryse [1994].

ため、需要と価格が高い時には会社は巨額の利潤を得たが、他方では、情況が変わるとたちまちのうちに困窮することになった。イギリス人が茶の輸入を増大させ、税率を減少させていた1784年以降、茶の価格は急降下し、SEICの利潤率の基盤は崩壊した。会社はそれから30年にわたって生き延びたが、ペーパーカンパニーにすぎなくなった[12]。

SEICは、非常に特化した会社であった。広東というたったひとつの港としか取引しなかった。扱った商品は、茶というただひとつの商品であった。このように特化したことは、SEICの別の一面と関係していた。以前からの会社と比較すると、SEICはごく小さな企業にすぎなかった。航海する船舶は1年で1隻か2隻であり、せいぜい3隻にとどまった。アジアには植民地も貿易拠点も、軍隊も管理運営にたずさわる人もいなかった。乗組員を含め、毎年平均して、250-300人しか働いてはなかった。1753年になるまで、航海のたびごとに独自の組織が編成され、株主と従業員は、船が帰還すると、一人ひとり利益の分け前を受け取った。1753年になってはじめて、資本金が永続的なものとなり、株が譲渡されるようになった。1760年代から、SEICはまた、広東に会館と店舗を構えるようになり、二人の総督supercargo［訳注：SEICの従業員であり、広東在住の中国商人と契約した。航海による利益から給与と利益の一部を受け取った］がそこに滞在した[13]。これは、東インドにおいて、イギリス、オランダ、フランスが従業員、防衛、軍事力、海運業などに巨額の投資をしたことと比較できるかもしれない。18世紀のオランダ東インド会社は100-150隻の船を使用し、約2万人の従業員（乗組員を除く）を雇用していたのだ[14]！

SEICのそれ以外の特徴は、外国市場に大きく依存していたことである。会社の根拠地は、スウェーデン西海岸の巨大な港湾都市のイェーテボリにあった。1731年の特許状によれば、イェーテボリがSEICの船舶の出港地かつ入港地であり、帰り荷もまたイェーテボリで競売された。帰り荷の大部分は、そこから他国へと再輸出された。それは主として、オランダ共和国、オーストリア領ネーデルランドとフランスであった。［再輸出の］正確な比率を産出することは困難だが、課税の対象となったSEICの輸入品（スウェーデンで消費される）と無税の再輸出を比較すれば、SEICの輸入品のうちスウェーデン国内で消費される割合は10分の1に満たなかったことが示される。

茶貿易業者

上述のように、SEICの取引商品としては、茶が圧倒的に多く、初期（1739-42）においては積載スペースのおよそ50％を占めた。しかし、茶は最大の利益をもたらす商品だったので、1750年代から1760年代にかけて、その比率は80-90％に達した。中国製品として2番目に重要なものは陶磁器であり、1730-67年には、積載スペースの10-18％を占めた。重い陶磁器と

(12) SEICが解散したのは、1813年である。
(13) Müller [2003], pp.31-33.
(14) Gaastra [1999], pp.86-87, 118.

軽いがスペースをとる茶は、貨物のバランスをとるうえでもまったくうってつけの組み合わせだった。さらに、陶磁器は臭わなかった。

スウェーデンの茶輸入が始まった時、量はごく少なかった。1739 年には、SEIC は 160 トンの茶を輸入した。しかし、18 世紀中頃になると、年平均 500-600 トンになった[15]。この量は、少なくともヨーロッパの側からみると莫大であった。表 1 は、広東の茶貿易に占めるスウェーデンの比率が 10-20％の間を上下していたことを示す。スカンディナヴィアの東インド会社（デンマークとスウェーデン）を合計すると、ヨーロッパが輸入する茶全体の 4 分の 1 から 3 分の 1 を輸入した。スカンディナヴィアの割合は、大国間の戦争（1756-63［七年戦争］、1776-83［アメリカ独立戦争］）の時代に極めて高くなった。デンマークとスウェーデンの茶輸入の重要性は、当時の通信記録から確認される[16]。

この表はまた、1730 年代から 1780 年代にかけて、茶輸入量が 6 倍になったことも示す。しかし、1719-1820 年の全体を通して、茶貿易量は 23 倍になった。茶の貿易はまた、長距離貿易の中で最も急速に成長した分野のひとつである。しかしそれと並行して、この貿易の外国貿易、国家歳入、最終的には個人所得に占める比率が非常に高くなかったなら、注目すべきことではないだろう。

スウェーデンは、人口が少なく貧しかったので、ヨーロッパが輸入した茶の 10-20％を消費することはできなかったことは明らかだ。茶の多くは、SEIC の船舶がイェーテボリに入港す

年度	SEIC	イングランドの貿易を除外	フランス	オランダ共和国	デンマーク	スウェーデン	アメリカ合衆国	総計
1719-25	6891		1340					12745
1726-33	8239		3924	2985	587	531		18854
1734-40	10399		7107	6474	5290	4700		33970
1741-48	14863		8006	15133	13248	10457		61707
1749-55	22983		14466	21074	12800	13405		88042
1756-62	24332	245	2104	16441	16192	15567		75746
1763-69	50547		17636	28546	16857	15389		128975
1770-77	51105	1157	27342	34818	19975	19052		153449
1778-84	56640	1725	14871	18720	28422	25792	432	155884
1785-91	135381	1874	4704	30625	10866	16104	9451	213284
1792-98	147357	1450	1650	9985	11899	9454	21335	204084
1799-1806	203133	3564	711	286	11351	14132	47995	284123
1807-13	206996	3427					28415	238838
1814-20	224971	11316		1521	500	1530	57047	296885

表 1　広東からの茶輸出量（年平均　単位：ピクル picul[17]）
出典：Dermigny, Louis, *La Chine et l'Occident. Le Commerce at Canton au XVIIIe siècle 1719-1833*, tome 1-2, Paris, 1964, p. 539

(15)　Konickx [1980], pp.451-452.
(16)　Kent [1973], p.117.
(17)　1 picul = 60.5 kg, Konickx [1980], p.442.

るとすぐに競売され、外国に再輸出された。再輸出は、スウェーデンの外国貿易全体と比較すると大きかった（表 2）。

スウェーデンのステープル商品（鉄、タール、ピッチ、板材）を運んだのは、何百隻もの船舶であった。それに対し、中国の商品は毎年たった 2 隻の船舶で運んでいた。それに目を向ければ、この数値は驚かざるをえない。たとえば、SEIC が雇用した従業員と船舶数の少なさと、鉄工業による雇用数と貿易量の多さが対照的であったことが、SEIC の活動が一般には重要ではないと思われた理由のひとつである。とはいうものの、輸出額がこれほど巨額であったことは、スウェーデンの貿易収支や他の商品の輸入、さらに、特にスウェーデン通貨の為替相場に大きな影響を及ぼしたはずである。

では、SEIC の再輸出品を購入したのは誰か。さらに、中国製品はどこに流れたのか。イェーテボリからの販売に関して保存されているデータから、再輸出品の大部分はアムステルダム、ロッテルダム、ハンブルク、ミッデルフルフ、オステンド、フランスの港に向かったことが示される。イギリスの地名が目的地として現れることもある。しかし、イングランドとの貿易は非合法であり、イングランド本国の管轄外の地域が書かれているにすぎない（たとえばチャネル諸島、マン島）。オランダは、巨大な再輸出拠点として機能したが、その対象はスウェーデ

年度	総輸出額（100 万 d.s.m［= 銀ダーレル］）	中国製品の再輸出額（100 万 d.s.m.）
1738	7.1	1.4
1739	7	2.1
1740	6.5	1.3
年度	総輸出額（リクスダーレル）	SEIC の再輸出額（リクスダーレル）
1777	3326895	1608898
1778	3155546	1645159
1779	3486439	1955505
1780	3250760	1919852
1781	4809924	2793428
1782	4866226	4064862
1783	4146924	1485490
1784	5041979	902664
1785	5162752	681113
1786		1506132
1787		1016659
1788	4862177	849085
1789	3675092	413523
1790		599313
1791	6668763	335468
1792	6664098	353328
1793	6631590	404961
1794	6761416	558951
1795	7567693	232224

表 2　スウェーデンの総輸出額と中国製品の再輸出額

出典 : 1738 年、1739 年、1740 年については、Koninckx, Christian, *The First and Second Charters of the Swedish East India Company (1731–1766)*. Kortrijk, 1980, p. 405 をみよ。1777-95 年については、Nyström, Joh. Fr. *De svenska ostindiska kompanierna. Historisk-statistisk framställning*. Göteborg 1883, Statistical Appendices を、さらに総輸出については、Board of Trade Archives (Kommerskollegium, Årsberättelser om utrikeshandel och sjöfart, Riksarkivet Stockholm) をみよ。

ンの東インド会社だけではなく、デンマーク、フランス、さらには当然、オランダの東インド会社もあった。さらにオランダから、熱帯地方の産品を積載した貨物が、ヨーロッパのあちこちに到着した[18]。

イギリス東インド会社が貿易を独占していたとはいえ、スウェーデンの公式統計では明らかにすることが困難であっても、スウェーデンが輸入した茶のかなりの部分がイギリス人のカップに入った。茶の卸売業者の私的通信文も、多くの証拠は提供しない。イェーテボリに定住した数多くの商人は、アムステルダム、ヘント、アントウェルペンの金融業者と協力して、再輸出を行った。だが、彼らの書簡からは、イギリスの密輸入貿易についてはわからない。

一般的に受け入れられている見解は、イギリス人は、18 世紀最初の数十年間に、ヨーロッパ最大の飲茶国になり、したがって、イギリスが茶の主要な目的地になったことである。広東のデータはまた、イギリスが決定的に重要だったことを示す。しかしながら、イギリスの茶市場は、イギリス東インド会社が独占しており、高い関税のために［外国人の進出が］制限されていた。この 2 つとも、イングランドの茶を高価なものにした。関税のため、価格はもとの 2 倍になった。こういう情況によって、茶は極めて密輸されやすい商品になった。事実、茶は典型的な密輸商品だと認識された。イギリス東インド会社が供給したのは、高級茶だけであった。もっと安価な茶が密輸されたのである。

イギリス政府は、1770 年代の茶の密輸量を、300-700 ポンド（1,350-3,000 トン）と推計した[19]。イギリスで消費される茶のおよそ半分が、非合法的に輸入された[20]。その多くが、スウェーデンから来たものだった。イングランドの外交官であるグッドリクはこう記した。1760 年までに、イングランド人の勘定で購入している卸売業者ではなく、イングランドの卸売業者だけが、イェーテボリの競売で毎年 80 万ポンド（約 350 トン）をもたらした、と[21]。スウェーデンから再輸出された茶はまた、イギリスで消費される茶のかなりの割合を占めた。SEIC の事業は、大きくイギリス市場に依存していた。

図 1 は、イギリスの茶市場の価格変動の直後に、中国製品の再輸出量が変動したことを示す。SEIC が大量の中国製品（茶）の再輸出をした時、価格は上昇し、市場が悪化すれば、SEIC の事業は悪化した。

SEIC の再輸出品の変動は、国際情勢とも関係していた。中国におけるスウェーデンの貿易と中国製品の再輸出のための重要な前提条件は、すなわち、イギリスとフランスが大きな抗争をしている間に、スウェーデンが中立政策をとったことである。それゆえ、七年戦争期（1756-63）に再輸出（と中国貿易）を目覚ましく増大させたが、1760 年代から 1770 年代にかけ著しく低下させたことに気づくだろう。SEIC はさらに 1776-1784 年に再び繁栄した。とりわけ 1780-83

(18) Müller [2003], pp.37-44.
(19) Cole [1958], p.396.
(20) Shmamas [1990], p.84.
(21) Kent [1973], p.119 (note).

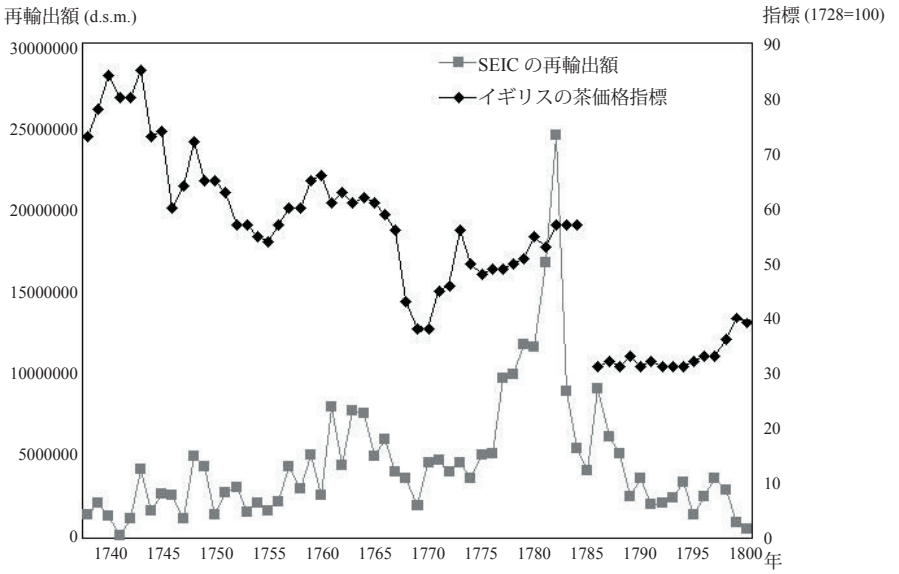

図 1　イギリスの茶価格の指標と関連させた SEIC の再輸出額

出典：SEIC の再輸出については、表 2 をみよ。茶価格の指標については、Cole, W A, 'Trends in Eighteenth-Century Smuggling', *The Economic History Review*, 2nd ser., vol.10, no 3, 1958, p. 410 をみよ。

年［の情況］は例外的なまでに良かった。それは、アジアとの貿易量が多いほとんどすべての国が､アメリカ独立戦争に参加していたからである。スウェーデンとデンマークは中立であり、この二国の東インド会社は、このような情況を利用して巨額の利益を得た（表 1)。1778-84 年は、スカンディナヴィア人がヨーロッパの茶貿易全体の 3 分の 1 以上を占めた。

しかしながら、アメリカ独立戦争の終結はまた、巨額の利益をもたらしたスウェーデンの中国貿易の終焉をも示した。第一に、イギリス政府は、ピットの 減税法 Commutation Act で、茶にかかる税を 110％から 12.5％（1787-95）にまで削減した[22]。この法の影響は、茶の価格指数に明確にみられる（図 1)。第二に、イギリス東インド会社は、茶の輸入量を 2 倍以上に増やした（表 1 をみよ)。スウェーデンの茶貿易への最後の打撃となったのは、ナポレオン戦争であった。スウェーデンに対して、オーストリア領ネーデルランドとオランダ共和国への再分配拠点が閉じられたからである。さらに、アメリカ人が広東との貿易を開始し、急速に拡大した（表 1)。

SEIC の性向と衰退の歴史が示すのは、この会社は、オランダ共和国とイギリスの特許会社と比較すると、まるで異なる企業であり、それはスウェーデンの他の特許会社にもあてはまるということである。形式的には、SEIC は、たとえスウェーデン市場が事業上重要ではなくても、スウェーデンの東インドとの貿易全体の独占権を握っていた。独占権を侵害するスウェーデン人の侵入者はいなかった。それよりも、この会社が、利益をもたらすアジア貿易への侵入者とみなされるべきである。つまり、スウェーデンの国旗と特許状、さらには国王の保護のも

(22)　Cole [1958], p.399.

とで活動する侵入者とみなすべきなのだ。SEIC は、侵入者として、規制された貿易が残した利益をもたらすニッチを活用することができたのである。しかしながら、SEIC の成功の基盤は、大企業と大国がニッチをなくしてしまった瞬間に消滅してしまった、しかしこれは、SEIC が東インド貿易全般に影響を及ぼさなかったとか、スウェーデンの視点からは、海外で活動する会社であり、スウェーデンにとってまったく重要ではないということではない。ダンカン・フォーブズがつとに 1744 年に記したように、SEIC が輸入する安価な茶は、スコットランドで飲茶の文化が普及する際に非常に大きな影響を及ぼしたし、それはたぶんイングランドにもあてはまるのである。スウェーデンの経済発展における、SEIC の影響を明確にするほうがに困難である。この問題については、次節でいくらか論じたい。

スコットランド、フランドル、それともスウェーデンの会社か？

上述した SEIC の事業戦略の説明は、ニッチへの侵入者としての性格が非常に強かったことを示す。外国人が SEIC に関与したことも、それに対する別の証拠だと認識されるかもしれない。第一に、この企業に投資された外国資本の比率は極めて高く、そのほとんどはフランドル、イギリス、スコットランドからのものであった。第二に、最初の数十年間、SEIC は、経験のある外国人を総督、役人、乗組員として雇用した。また、従業員のなかでのスコットランド人、フランドル人の要素はかなり強かった。事業を遂行するうえで、この会社はオーストリア領ネーデルランドを根拠地とした商人ネットワークを利用した。ヘントとアントウェルペンの銀行家と商会は、ネーデルランドからイェーテボリへ、さらにはカディスへの貨幣の移動を組織化した。次いで、同じ商会が同じ経路を使い、茶などの商品をスウェーデンから輸送した。

ここで述べたすべてのことが、SEIC はオステンド会社の後継者であったことを示す。オステンド会社は、オーストリア領ネーデルランドのオステンドを根拠地とし、つとに 1718 年に広東との貿易を開始し、のちの SEIC と同様、もっぱら茶貿易に専念した。オステンド会社が存在していた時期は短期間であったが、英蘭の東インド会社のかなり強力な競争相手であった。たとえば、1718-29 年には、オステンド会社とイギリス東インド会社は、同量の茶（それぞれ約 700 万ポンド）を輸入した[23]。結局、オーストリア皇帝に対して、オランダとイギリスが外交面から圧力をかけたことが、1731 年にオステンド会社が最終的に解散する主要な要因となった。オーストリア領ネーデルランドが中国との貿易を放棄したことは、オランダとイギリスがマリア・テレジアの王位継承権を認める条件のひとつであった。

フランドルの投資家（プロリ家 Proli、モレトゥス家 Moretus、マールカンプ家 Maelcamp、ド・プレ家 de Pret）に加えて、イギリス東インド会社とのトラブルに巻き込まれたり、南海会社の失敗後イギリスを去った数多くのスコットランドとイングランドの船員と商人がいた。これ

(23)　Degryse [1994], p.486.

らの人々の一人に、著名なスコットランドの親族であるコリン・カンベル Colin Campbell がいる。巨額の金を失った南海泡沫事件ののち、彼はオステンドに移り、オステンド会社の総督になった。オステンド会社の事業がすでに停止していた 1720 年代後半には、イェーテボリのニクラス・サールグレン Niklas Sahlgren と接触した。1731 年の SEIC の創設は、たとえカンベルが SEIC の初期の史料にはあまり名前がみられなくとも、この二人の協力の成果であった。すでにみたように、特許状はヒンドリヒ・ケーニヒ商会宛てに出されたものであった。その理由は極めて単純である。イギリス政府は、SEIC ともぐりの貿易に従事していたイギリス臣民との関係を隠ぺいすることが大切だったからである。カンベル自身、スウェーデン国民になり、貴族となった[24]。

スコットランドとイギリスの仲買人は、SEIC の船舶に人員を提供した。それは、ポルト・ノヴォ事件で言及した重要問題のひとつにもなった。イギリス政府は、本来禁止されているイギリス臣民の雇用をしているという理由で SEIC を批判した。イギリスの国務大臣であるハリントン Harrington は、事件ののちに次のように記した。

> 明らかに、ウルリカ・エレオノラ号の貨物のごく僅かしか、場合によっては何も、スウェーデンの臣民のものではない。この貿易に参加し、主に関心を持っているのはイングランド人である。彼らは、以前はイギリス東インド会社の従業員であった。そして生まれつき［イングランドの］国王陛下の臣民であるにもかかわらず、法と国王への忠誠義務に反して行動している[25]。

1740 年の日付があるリストには、SEIC が雇用していたイギリス臣民の全員の名が書かれている。このリストは、ポルト・ノヴォ事件の外交的解決に関係している。42 名のイギリス臣民の名があり、スコットランド出身の者もいた。特に最初の航海の総督の中には、イギリス人が圧倒的に多い[26]。1740 年以降でさえ、スコットランド出身の商人が SEIC の貿易に、投資家や帰り荷の購入者として参加していた。だが、SEIC に占める彼らの比率は低下した。スウェーデンの総督は、外国人の同僚から学習し、やがて、スウェーデンが外国人に取って代わった。18 世紀後半に、SEIC の外国人従業員はごく僅かしかいなかった。

フランドル人は、主として投資と販売の組織化の問題での役割が大きかった。SEIC の初期の時代をみると、巨大なフランドル人の商会が投資資金の約半額を占めていた。たとえば、スウェーデン女王号 Drottning af Swerige とストックホルム号 Stockholm の航海で、フランドル人の投資家は、資金の 40％を投資した。1766-86 年の特許状でも、SEIC の投資額の 26.2％を占

(24) Grill [1961], pp.101; Konickx [1980], pp.39-40.
(25) Grill [1958], p.56.
(26) Kjellberg [1975], p.128.

めていた。[27]

SEIC がもつフランドル、イギリス、スコットランドの富と東インド（中国）でのノウハウは重要だった。けれども、SEIC が海外の企業だと特徴づけることはできない。外国の影響は重要であり、SEIC 初期の時代の成功にとっては決定的であった。だが、やがて小さくなっていった。スウェーデン商人は、1750 年以降は外国人のための前線として活動することが多くなったとしても、SEIC 内部における所有権を増大させた。ずっと重要なことは、SEIC の従業員として外国人に取って代わったことかもしれない。乗組員、海軍将校、総督はますますスウェーデン人から補充されるようになっていった。

SEIC でスウェーデン色が強まることはまた、貿易での利益がスウェーデンにとどまり、別の部門に投資されることを意味した。スウェーデンの総督で成功した典型的経歴とは、利益をもたらす広東への航海を二度行い、スウェーデンの地主になることであった。このような総督は、鉄工所に投資した可能性が一番高い。さらにたぶん漁業、繊維産業、他の多くの活動に投資した。それに加えて、SEIC の株に投資した。[28]

SEIC は、たとえ建造される船舶数が多くはなかったとしても、スウェーデンの建造業に大きな衝撃を及ぼした。SEIC の船舶は、ほとんどすべてが、スウェーデン、なかでもストックホルムの造船所で建造された。そのため資源、マンパワー、とりわけ有効なノウハウが数多く蓄積された。しばしばスウェーデン語で中国人 Chinamen と呼ばれた船舶は、ヨーロッパで最大かつ最も効率的であった。[29]

結局、関与した人員は少なかったが、SEIC とスウェーデン経済におけるそれ以外の部門の間には多くの連鎖があった。SEIC の衝撃のすべて計量化することは大変困難ではあるが、この会社の活動は、スウェーデン経済全体にとって意義深い結果をもたらし、18 世紀に大西洋経済が形成される時に、スウェーデンがそれに統合された点で重要であったと結論づけられよう。

しかしながら、SEIC の歴史の最も重要な側面は、イギリスとヨーロッパの飲料文化を転換する際に果たした役割である。貿易データは、SEIC がヨーロッパにおける茶の主要な供給者であったことを示す。スウェーデンとデンマークから再輸出された茶は、大量に、ヨーロッパで最大の紅茶消費国イギリスに向かったようである。密輸された茶は極めて安価であり、下層階級の飲茶を刺激した証拠もある。飲茶は、SEIC の茶輸入がなければ、これほど普及するはずがなかったことはほぼ確実である。SEIC はまた、イギリス人が、茶を飲む国民になることを促進したのだ。

---

(27) Konickx [1980], pp.289, 131.

(28) Müller [1997]; Åberg [1988].

(29) Konickx [1980], pp.153-179, 444-449. ストックホルムの帆桁と SEIC の船舶についてもまた、Zethelius [1955-56] をみよ。

【参考文献】

Åberg, Martin. [1988]. *Svensk handelskapitalism–Ett dynamiskt element i frihetstidens samhälle? En fallstudie av delägarna i Ostindiska kompaniets 3:e oktroj 1766–1786* (licentiate's dissertation, Department of History, Gothenburg University).

Åberg, Martin. [1990]. 'The Swedish East India Company 1731-66. Business Strategy and Foreign Influence in a Perspective of Change', *Scandinavian Journal of History,* vol. 15, no. 2, pp.97-108.

Cole, W A. [1958]. 'Trends in Eighteenth-Century Smuggling', *The Economic History Review*, 2nd ser., vol. 10, no. 3, pp. 395-410.

Degryse, Karel. [1994]. 'The origins of the growth of West-European Tea Trade in the 18th century', in Friedland, Klaus (ed.), *Maritime Food Transport*, Köln.

Dermigny, Louis. [1964]. *La Chine et l'Occident. Le Commerce at Canton au XVIIIe siècle 1719-1833*, tome 1-2, Paris.

Gaastra, F.S. [1991]. *De geschiednis van de VOC*, Leiden.

Gill, Conrad. [1958]. 'The Affair of Porto Novo: An Incident in Anglo Swedish Relations', *The English Historical Review*, vol. 73, no. 286, pp. 47-65.

Gill, Conrad. [1961]. *Merchants and Mariners of the 18th Century*, London.

Kent, H.S.K. [1973]. *War and Trade in Northern Seas. Anglo-Scandinavian economic relations in the mid-eighteenth century*, Cambridge.

Kjellberg, Sven T. [1975]. *Svenska ostindiska compagnierna 1731-1813. Kryddor. Te. Porslin. Siden*, Malmö.

Koninckx, Christian. [1980]. *The First and Second Charters of the Swedish East India Company (1731–1766)*, Kortrijk.

McKendrick, Neil, John Brewer and J.H. Plumb. [1982]. *The Birth of a Consumer Society. The Commercialization of Eighteenth-Century England*, London.

Mintz, Sidney W. [1985]. *Sweetness and Power. The Place of Sugar in Modern History*, New York（川北稔・和田光弘訳『甘さと権力 —— 砂糖が語る近代史』平凡社、1988 年）.

Mui, Hoh-cheung, and Mui, Lorna H. [1984]. *The Management of Monopoly. A Study of the East India Company's Conduct of its Tea Trade, 1784-1833*, Vancouver.

Müller, Leos. [1997]. 'Mellan Kanton och Göteborg. Jean Abraham Grill, en superkargörs karriär', in Backlund, Janne et al. (eds.), *Historiska etyder. En vänbok till Stellan Dahlgren*, Uppsala.

Müller, Leos. [2003]. 'The Swedish East India Trade and International Markets: Re-exports of teas, 1731-1813', *Scandinavian Economic History Review*, vol. 51, pp. 28-44.

Nyberg, Kenneth. [2001]. *Bilder av Mittens rike. Kontinuitet och förändring i svenska resenärers Kinaskildringar 1749-1912*, Göteborg.

Nyström, Johan Fredrik. [1883]. *De svenska ostindiska kompanierna: historisk-statistisk framställning*, Göteborg.

Pomeranz, Kenneth. [2000]. *The Great Divergence. China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton.

Shammas, Carole. [1990]. *The Pre-industrial Consumer in England and America*, Oxford.

Zethelius, G.A. [1955-56]. "Stockholms-varven under 1700-talet", *Sjöhistorisk årsbok*, pp 57-100.

【訳者付記】

本稿の著者であるレオス・ミュラー Leos Müller 氏は、1962 年生まれで、現在、スクックホルム・セーデルテルン大学 Stockholm Södertörns högskola の助教授である。主要著書に、*The Merchant Houses of Stockholm, c. 1640-1800: A Comparative Study of Early-Modern Entrepreneurial Behaviour*, Uppsala, 1998、及び、*Consuls, Corsairs, and Commerce: The Swedish Consular Service and Long-distance Shipping, 1720-1815*, Uppsala, 2004 がある。日本語訳された論文として、玉木俊明訳「18 世紀ストックホルム商人の社会 —— 競争関係と協力関係の渦中の外国人とスウェーデン人 ——」『関西大学西洋史論叢』第 7 号、2004 年、74-86 頁がある。

本稿は、2004 年 11 月 1 日に大阪大学で開かれたグローバル・ヒストリー・セミナーの報告、'Swedish East India Company and trade in tea, 1731-1813' に加筆、修正したものの全訳である。なお、本稿のオリジナルの英文原稿は、*Balto-Scandia*, Vol. 14, 2005 で出版される予定である。［ ］内の語句は、訳者が補ったものである。